第 290 号　　生徒さん・ご家庭・先生をむすぶ新聞

とらいあんぐる

2014 年 3 月

一音会ミュージックスクール発行

「ハタのおけいこ」

一音会にかかわる生徒さん、ご家族のほとんどが、「ハタのおけいこ」が何であるか、ご存じでしょう。絶対音感のおけいこのことです。

絶対音感のおけいこで、小さなハタを使うことから、「ハタのおけいこ」という呼び名が定着しました。

多くのご家族の方にご協力いただき、たくさんの絶対音感保有者が、この小さな音楽教室から生まれていきました。

特別なおけいこをすることなしに絶対音感を持つ可能性は、０．１％～０．２％程度といわれています。もっと少ない数字を出している文献も、たくさんあります。

１０００人に一人しかいないはずの絶対音感保有者が、一音会にはたくさんいます。

まれな能力であるだけに、身につけるには、努力が必要です。

努力なしに身につけられるのだとしたら、０．１％などという数字にはならないでしょう。もっと多くの人が、身につけているはずです。

おそらく、絶対音感を身につけるまでには、どのご家庭でも、１冊の本が書けてしまうくらい、たくさんのエピソードが生まれていると思います。

びっくりしたことも、不安にかられたことも、うんざりしたことも、きっとあったでしょう。

私の家でも、それは同じでした。

私の２人の子どもたちも、１歳１０か月から、ハタのおけいこをはじめました。

皆さまに、おけいこのアドバイスをさせていただく立場ではありますが、なんらつまづくこともなく、理想的なおけいこをしていた・・・、なんていうことは、当然ながら、まったくないのです。

その意味で、何も特別なことはありませんでした。

１歳１０か月でおけいこをスタートしたキョウコは、とても言葉の遅い子どもでした。当時、意味ある言葉は、何もいいませんでした。「アカ」といえるわけもありません。

「音がきこえたら、赤いハタをあげる」。

たとえ「アカ」といえなくとも、ここだけは譲れないところでした。

しかし、これができるようになりません。

どうも「音がきこえたらハタを～」という説明自体が、伝わらないようです。

ずっと、私がハタを持ってやってみせるか、強制的に手にハタを持たせ、私が手をそえて上げさせるか、でした。

毎日、毎日、出口の見えないトンネルを歩いている心境でした。

猫に教えた方がはやいのではないか、とさえ思いました。

「赤」だけのおけいこが、どれくらい続いたでしょうか。２歳になっても、しばらくは「赤」だけのおけいこをしていましたので、数か月は、続けたと思います。

あいかわらず、キョウコは何もいいません。

ハタをさわることはあっても、かじっているか破いているか、です。上げることはしません。音はきいているかどうか、分かりません。

２歳半になった頃は、「赤」と「黄色」で、おけいこしていました。

大きな声ではいえませんが、「赤」だけのおけいこをマスターしていませんでした。あいかわらず、音とは無関係に、ハタの割りばし部分を、一生懸命かじっています。

「黄色」が加わることで、おけいこの意味がはっきりしてくるのではないかという期待があったのですが、その期待は見事に裏切られたわけです。

もっとも苦しく、そして長かったのが、この「赤」と「黄色」の時代です。

この時代を脱した時は、３歳のお誕生日をとうに過ぎていましたから、結局、まる１年がその時代に費やされたことになります。

１日５回、毎日、ハタを上げて見せ、ひざにキョウコをのせて、手をとってハタを上げさせました。キョウコは、決して「アカ」とはいいません。

それまで教室で多くの生徒さんに接してきた私でしたが、「こんなことがあるのか？」と、驚くことの連続で、驚き疲れたころには、絶望的な気持ちになっていました。

もちろん、このプログラムを開発した張本人である母も、キョウコのおけいこには、しょっちゅう立ち会ってくれていました。

母は、いつものように、逆境になればなるほど、張り切る人でした。

「アヤコ、これはね、私たち２人に課された試練よ！」

母の言葉は、私をふるい立たせるものでした。

「もしかしたら、このプログラムにさらに磨きをかけるために、神様が世界で一番、ハタのおけいこに向かない子どもをよこしたのかもしれない」

母は、本気でそう思っていたようでした。

つられて私も、そう思えるようになっていきました。

しかし、私と母の気持ちが、いくら前向きになっても、事態はいっこうに変わりませんでした。

気持ち次第で何とかなるような、そんな甘いものではなかったのです。

「この子は、もしかしたら絶対音感がつかないのかもしれない・・・」

日に日につのる私の不安を、ある時、母に打ちあけてみたことがあります。

「お母さん、もし実の孫が絶対音感をつけることができなかったら、お母さんは困るのじゃない？」

母は目を丸くして、ききかえします。

「困る？　お母さんが？　どうして？」

「だって・・・プログラムを開発した人でしょう？」

母は、まるでその瞬間まで、そのことを忘れていたかのようでした。

母は長い沈黙のあと、こういいました。

「・・・絶対音感がつかなくて困るのは、キョウちゃんよ・・・」

そうでした。

私は、そのことを忘れていました。

やる気をもりかえした私でしたが、変化の兆しはおとずれません。

時間は、どんどん経ちます。

とうとう、さすがの母も、つかない可能性を視野に入れはじめました。

その時、ハタのおけいこスタートから、実に１年以上が経っていました。

なのに、なんとキョウコは、一度も「アカ」といえていませんでした。

「アヤコ、お母さんは、こう思っている。もしキョウちゃんが、絶対音感を身につけることができなかったら、身につかないことがあると示されるだけでも、十分、意味があることなのじゃないかしら？」

そこから、私と母の目標が変わりました。

「これだけやっても、身につかないことがある」といえるだけのおけいこにしなければいけないと思いました。

「おけいこ回数が不足していたから、つかなかった」なんていう、当たり前の理由にならないよう、おけいこ回数は、１日１０回を最低ラインとしました。２０回やった日もありました。

すると、キョウコに変化がおとずれます。

機嫌の良い時、「赤」の音に対して、「あー」というようになったのです。

「アカ」とはいいません。

それでも、はじめて反応らしい反応が出たのですから、大きな進歩です。

特別、上機嫌の時には、「あー」といって、赤のハタを、うれしそうにパタパタ振るようになりました。

しかし、喜ぶのもつかの間、「赤」に反応するのも、機嫌の良い時だけで、たいていは無言でハタをかじっています。

「黄色」の時には、何もいいませんし、「黄色」のハタを持つこともありません。

いつか「キイロ」といってくれるかもしれないと、待ちましたが、数か月待っても、変化はありませんでした。

また、変化のない日々が続き、手詰まりを感じてきた頃、母と作戦会議をします。

母：「キョウちゃん、『黄色』に反応しないわね」

私：「まるで、そこにないかのようにふるまうよね。『赤』の時とは、あきらかに違うから、逆に、分かっているよね」

母：「でも、『赤』にかならず反応するというわけでもないから、先には進

めないわ・・・」

私：「う～ん・・・」

母：「・・・嫌いなんだと思う」

私：「何が？」

母：「黄色が」

私：「なんで？」

母：「そんなの知らない」

私：「黄色が嫌いって・・・音が？　色が？　色の名前が？」

母：「だから、そんなの知らないって。全部かもしれない。ほら、何もかも嫌いってことあるじゃない？」

私：「ええー？！」

母：「・・・・・」

私：「・・・・・」

次の瞬間、ほぼ同時に、私と母は、同じ結論にいたります。

「黄色」をとばそう！

翌日から、キョウコのおけいこには、「黄色」のかわりに「青」が加わりました。

「赤」と「青」のおけいこです。

すると、おけいこは急に動き出しました。

「あー(赤)」といったり、「おー(青)」といったりしながら、ハタを器用に操ります。

今までの苦労の日々は何だったのかと思うくらい、スムーズです。

１週間後に、「くー（黒)」を増やしました。

子どもは、いつも理解不能な異星人です。何につまづくか、分かりません。

いまだに、キョウコが「黄色」の何がそんなに嫌だったのか、分かりません。

ハタのおけいこでは、子どもたちが異星人ぶりを、存分に発揮してくれます。

私の子どもたちはもう「ハタのおけいこ」を卒業してしまいましたが、できることなら、もう一度、毎日、「ハタのおけいこ」をして、その異星人ぶりに、驚いたり悩んだり笑ったりして暮らしてみたいと思うのです。

（江口　彩子）